

特別支援教育研究論文集

—令和4年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

子どもの「よさ」を生かした
自立活動の指導の在り方を考える実践研究
—知的障害の子どもの自立活動の指導を中心に—

研究代表 教諭 徳田 朋子（岡山県立岡山南支援学校）
教諭 三浦 拓也（青森県立弘前第一養護学校）
教諭 小森谷さおり（宮城県多賀城市立多賀城小学校）
主任教諭 千葉 聡子（東京都羽村市立羽村西小学校）
教諭 天谷由香里（静岡県立吉田特別支援学校）
教諭 金原 正和（静岡県立浜松特別支援学校）

令和5年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

要旨

自立活動は、個々の幼児児童生徒が有する障害による困難さに対応した指導であり、学校教育法第72条の後段を受けて、特別支援学校の目的を達成するために設けられ、特別支援学校の教育課程において特設された指導領域である。その指導を行うことによって、幼児児童生徒の人間としての調和のとれた育成を目指している。多様化する現代社会の中で、その人が、その人らしく主体性をもって生きていくために、教師が子どもの「よさ」を見取り、子どもの「よさ」を生かした自立活動の指導を提案したいと考えた。そこで、本研究では、子どもの「よさ」の着眼点を明らかにし、過去の実践を振り返りながら、知的障害のある子どもの「よさ」を生かした自立活動の指導の在り方を提案することを目的とする。

協議の方法は、主にオンライン会議システムを用いた。子どもの「よさ」を生かした自立活動の指導を考える上で、文献研究、学校訪問や議論を通して、子どもの「よさ」を生かした自立活動について協議を重ねた。その話し合いの中で得られた子どもの「よさ」について、カテゴリー化を行い、カテゴリーごとの特徴、その子どもの「よさ」の見つけ方などについて、議論を通して分析を行うこととした。分析を通して得た「子どもの『よさ』を見取ることができた場面」と「子どもの『よさ』を見つけた際の教師の見方や視点」という着眼点をもって、構成員それぞれの過去の自立活動の指導の実践について振り返りを行った。その結果を構成員6人で共有し、自立活動の指導における子どもの「よさ」の活用方法について議論を通して分析した。

文献研究からは、知的障害教育における自立活動の実践の文献は少ないことが分かった。特に、知的障害単一の場合は、個々の実態によっては自立活動で指導する内容の捉えが分かりにくく、各教科等を合わせた指導には目がいくものの、自立活動についてはあまり特化して考えられていなかったためと推察した。子どもの「よさ」の分析では、子どもの「よさ」は多角的に捉えられるため、定義付けはできなかったが、カテゴリーに整理することができた。子どもの「よさ」は学校生活全般で見つけられるため、着眼点をもって子どもの「よさ」を見つめようとする教師の姿勢が重要であることが明らかになった。子どもの「よさ」には、「活動（指導）に生かせる子どもの『よさ』」と「さらに伸ばしたい子どもの『よさ』」に分類されるのではないかという結論に達した。実践事例の分析では、子どもの「よさ」の生かし方には様々なアプローチの方法があることが示された。子どもの「よさ」を生かした自立活動の指導は、子どもの主体性を伸ばすことにつながっていたことから、教師が意識的に子どもの「よさ」に着目して指導を行うことが効果的であると考えた。

一方で、課題も散見された。教師の子どもの「よさ」を見つめようとする意識や姿勢の中から見出された子どもの「よさ」の視点は、教師主体の見取りであって、子ども本人が自覚している子どもの「よさ」ではないことである。また、本人主体の自立活動の指導を行うためにはどのように合意形成を行い、自立活動の指導に活用していくことができるかについても、より多くの実践事例の収集・分析により、さらなる検証を行う必要がある。

キーワード：知的障害・自立活動・その人らしさ・子どもの「よさ」・子どもの主体性